

# 国際環境と情報戦

## ——駐エジプト武官時代のボナー・フェラーズ——

井口 治夫 (iguchi@info.human.nagoya-u.ac.jp)  
〔名古屋大学〕

International environment and intelligence: Bonner Fellers' years in Cairo as American Military Attaché  
Haruo Iguchi  
Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, Japan

### Abstract

This article examines Bonner Fellers' years in Cairo, Egypt as American Military Attaché. Although Fellers is relatively well known in his role in advising General Douglas MacArthur in sparing the Japanese Emperor from War Crimes prosecution, his years in Cairo is relatively unknown. Fellers was America's chief intelligence officer in Cairo from Fall 1940 to Summer 1942, a period when his country's President and British Prime Minister Winston Churchill were working closely to create a *de facto* alliance based on sharing crucial intelligence concerning the Axis Powers. Fellers, ambitious and able, provided keen analysis and observations to his superiors in Washington, D.C. However, his encrypted cables were secretly deciphered by Italy and Germany that served as a crucial factor in Rommel's military successes against Great Britain in North Africa. The so-called "Fellers Affair" is examined in the context of intelligence warfare in Egypt and his rivalry with Joint Chief of Staff George C. Marshall's right-hand man, Dwight Eisenhower. Finally, Fellers' direct appeal to President Roosevelt for augmenting American forces in the Middle East resulted in the latter's decision to pursue that over caution expressed by Marshall and Eisenhower. This and Fellers' relations with Rahman Abdul Azzam Pasha and the Yugoslavian situation were indicative of his strong ambitions and activism, both of which would help fuel his activities in the Pacific under General Douglas MacArthur.

### Key words

Bonner Fellers, Office of Strategic Services, Erwin Rommel, Roosevelt, Churchill

### 1. はじめに

「フェラーズの友人は私の友人ではない」と北アフリカ作戦米国陸軍トップのドワイト・アイゼンハワー (Dwight Eisenhower) は、ボナー・フェラーズ (Bonner Fellers) の友人であると自己紹介してきたランファーリー子爵夫人 (Countess of Ranfurly) に冷淡に語ったことがある。才色兼美の子爵夫人が経験した、1943年秋、アイゼンハワー主催の夕食会での一見小さな事件であった<sup>(1)</sup>。フェラーズの任務は、陸軍省の諜報部に英国の中東における軍事情勢を報告することのみならず、統合参謀会議直轄の戦略情報局 (Office of Strategic Services, OSS) とその前身であった情報統括室 (The Office of the Coordinator of Information, COI) の最高責任者ウィリアム・ドノヴァン (William Donovan) 大佐に同様の報告を行うことであった。ランファーリー子爵夫人は、新婚草々中東戦線に従軍した夫のそばにいたい願望から、1940年秋カイロの英国経済相直轄の特務機関 (Special Operations Executive, SOE) のカイロ所長秘書として勤務しながら<sup>(2)</sup>、1941年2月以降フェラーズと情報交換を行っていたのであった。彼も SOE のカイロ所長も知らなかったことは、彼女が、英国陸軍

に SOE の動向を伝えていたことであった。彼女は、SOE のカイロ所長宛の機密電報にアクセスできた<sup>(3)</sup>。

フェラーズは、1941年春以来この子爵夫人の夫がイタリア戦線でイタリア軍の捕虜になってしまったその消息を探手助けをしていた。彼にとっては、彼女を通じた人脈の開拓は重宝できた<sup>(4)</sup>。

フェラーズはこの子爵夫人に、1941年4月に米国は英国を支援すべく間もなく参戦するのではないかと語り、また、独ソ戦争が始まると、周囲の圧倒的意見はソ連の敗北は時間の問題であるという考えであったのに対して、ソ連はドイツの猛攻に耐えられるという持論を展開した<sup>(5)</sup>。米国が第2次世界大戦に参戦した直後、フェラーズは、この子爵夫人に、自分は、中東の英軍が対ドイツ軍で装備が劣っているにもかかわらず自信過剰であると批判した。また、フェラーズは、彼が描く英国の中東における軍事情勢分析が、英国に厳しい内容であることから、米英同盟関係の強化を推進する米国本国政府と駐カイロ米国大使館で評判が悪いとぼやいたのであった。そして、フェラーズは、英国はその古いしきたりをかたがり捨て、また米国は拝金主義を捨ててお互い手をとりあって協調していかないと、両者の足並みのふぞろいは、明日の世界をソ連の主導権にゆだねることを招くであろうと論じたのであった。フェラーズは、ソ連はドイツの猛攻に持ちこたえられると主張していたのであった。また、

彼は、戦後の中東でユダヤ人にパチカン公国のような領土を与えるべきであると論じた<sup>(6)</sup>。

アイゼンハワーに睨まれていたフェラーズという人物の中東における活動はどのようなものであったのであろうか。また、彼の世界観とはどのようなものであったのであろうか。最後に、いわゆる「フェラーズ事件」とは、当時の国際環境のどのような文脈で展開されていったのであろうか。フェラーズは、対日占領初期政策で、ダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur) の軍事秘書として、天皇の訴追回避と天皇を利用しながら占領政策を行う推進力として暗躍したが、彼は、1943年夏にマッカーサーのもとで働きだす前からマッカーサーと親密な関係にあった。本論文はこのことと関連づけながら、上記の質問について、フェラーズの駐カイロ武官時代を中心に検証を行う。フェラーズは、政治介入型の軍人で、1942年の国際政治の裏面史と、米国参戦前から参戦後の米国内政治で暗躍した野心的な戦略家であった。

フェラーズは、フィリピンで、軍事顧問団長ダグラス・マッカーサー元米国陸軍参謀総長に1937年10月以降重んじられたことで、マッカーサーの参謀をつとめていた、それまでマッカーサーの側近であったアイゼンハワーとライバル関係になった。フェラーズは、帰国後、師と仰ぐマッカーサーとの連絡を書簡によりまめに行った。7年間もマッカーサーに奉公して1940年初頭に米国に帰国したアイゼンハワーが、米国参戦後に、ジョージ・C・マーシャル (George C. Marshall) 参謀総長の庇護のもと急速に出世するとは、フェラーズもアイゼンハワー自身も想定していなかったであろう。アイゼンハワーは、1941年10月に大佐から准将に昇進したのみならず、日米開戦直後、マーシャル参謀総長の命令でテキサスの第3方面軍参謀からワシントンの陸軍省に異動し、それ以降マーシャルの秘蔵っ子としてごぼう抜き的人事で1942年7月欧州方面の米軍総司令官になった。フェラーズとは対照的に、陸軍士官学校卒業生の大方の出身者と同様、アイゼンハワーは、政治と政治家を忌避する傾向があった。彼は、帰国後念願の参謀職でない軍の指揮官の仕事にありついた。彼はワシントン州フォート・ルイスの第3師団第15歩兵隊第1大隊の指揮官として急速に行われつつあった米国軍の兵力養成の一翼を担ったのであった。それでも陸軍内の彼の評判は大変優秀な参謀ということであり、アイゼンハワーとしては今後の昇進を考えた場合指揮官の経験が大変短いのがマイナスになると考えていたのであった。1940年秋、彼は陸軍省戦争計画部のスタッフとして異動を命じられそうになったさい、これを回避すべく交渉し、それによるストレスが原因で帯状疱疹による入院となってしまった。結局、マーシャル参謀総長を含めた陸軍上層部は、彼をフォート・ルイスの軍隊附一般幕僚とし、彼の要望を聞き入れたのであった。翌年3月彼は第9方面軍参謀に抜擢され、その直後念願の大佐へ昇進となった。アイゼンハワーは、彼自身の軍人としての人生が大佐どまりであると考えていたのであった。1941年11月になるとテキサスの第3方面軍参謀に転出した。ア

イゼンハワーと士官学校の先輩であったパットン (George C. Patton) 大佐の交友関係も1919年以来親しい関係にあり、両者は第2次世界大戦後の対独占領政策 (ナチズム撲滅) を巡ってアイゼンハワーがパットンを解任するとは誰も予言できるはずがなかった<sup>(7)</sup>。

## 2. 駐エジプト武官時代とフェラーズ事件

1940年7月、フェラーズは、スペインへ陸軍武官として赴任することを命ぜられたが、その直後にカイロへ武官として赴任することに急遽変更となった。8月、スペインへ赴任する用意を行っていたフェラーズは、陸軍士官学校同期生で親友のカーター・クラーク (Carter W. Clarke) 少佐に米国の防衛に関する自身の認識を述べた。フェラーズは、カナダ南部からカリブ海のイギリスおよびフランスの島々に米軍の基地の確保が西半球防衛のため必要であることを唱えた。フェラーズは、日本は米国西海岸に足場を確保しない限りマニラとハワイを攻撃できないであろうから、西海岸の防衛体制が十分なので、これらのことは心配していなかった<sup>(8)</sup>。

クラークは、当時西海岸のシアトル市で陸軍省信号部アラスカ方面の責任者をつとめており、1942年5月から、暗号解読を行う米国陸軍省陸軍諜報部特務室長 (Chair, Special Services Branch) に就任した。1943年初頭、彼は、当時OSS内でも存在していた、独ソ和平の可能性を懸念したため、のちにヴェロナ計画と呼ばれるソ連の外交暗号解読に着手することを同室に推進させた。

フェラーズは1940年10月にカイロの米国公使館付武官としてエジプトへ赴任した。フェラーズは本国宛てに英国軍の対ドイツ軍事情勢を逐次報告する重要な任務を遂行することになったが、任務中歴史的な事件に巻き込まれた。

フェラーズがカイロ入りした時点でフランクリン・ルーズヴェルト (Franklin D. Roosevelt) 大統領とウィンストン・チャーチル (Winston Churchill) 首相は米英の軍事協力を緊密化していた。そして、1941年8月には両首脳は大西洋憲章を発表し、戦後秩序の輪郭を描き始めていたわけであるが、英国軍は北アフリカで軍事力の点ではドイツに対して優位にあったのにもかかわらず「砂漠の狐」の異名で知られるアーウィン・ロンメル (Erwin Rommel) 将軍率いるドイツ戦車軍団により敗北に次ぐ敗北を喫していた。戦略的拠点であったエジプトがドイツ軍の脅威にさらされていた。

1941年7月に大統領令により戦略情報局 (OSS) の前身である情報統括室が、英国諜報機関の支援のもとで設立された。戦後ジェームズ・ボンド (007) シリーズの著者となったイアン・フレミング (Ian Fleming) は、英国諜報機関の任務として米国で、情報統括室長に就任したドノヴァンに対して顧問をつとめ、英国が入手した機密情報をドノヴァンに提供したりしていた。フレミングは、米国が海外にネットワークを張り巡らせていた武官たちを米国の諜報活動に有効利用することを政策提言した。イギリスにとってエジプトの守備は、地中海を枢軸国側

の影響下から奪還し、また、中東の油田地帯を守る上で死活的問題であった。もしもカイロがロンメル戦車部隊に陥落した場合、独伊は、中東の油田地帯の奪還、そして、東部戦線で死闘を繰り広げていた独ソ戦は、ドイツに有利な形成の流れを作ることが十分に可能な事態となったであろう。

フレミングが米国政府に持ち寄った英国側の政策提言を受けて、米国政府と英国政府は、それぞれが収集した機密情報を情報共有することとなった。この情報共有の一番極秘の事項で、英米首脳をはじめとするごく少数の軍人を含む政府高官しか知らなかった事柄は、英国によるドイツの最高機密暗号解読成功にもとづく情報収集(ウルトラ Ultra)であり、米国側による日本国外務省の最高機密暗号解読成功に基づく情報収集(マジック Magic)であった。英国はウルトラに基づく情報提供を米国政府高官に行い、米国政府は、マジックに基づく情報提供を英国政府高官に行っていた<sup>9)</sup>。

米英情報共有の一環として、英国側は、米国武官に対して、北アフリカにおける英国軍の軍事動向について制限を加えることなく情報提供を在カイロ米国武官に行った。当初この任務に当たっていたのは、フェラーズを含む複数の武官のうち、海軍武官であった人物であったが、彼が11月に帰国すると、米国政府がこの件について、フェラーズを抜擢した。フェラーズは、北アフリカの英国軍軍事動向に関する報告を、米国陸軍省の諜報局(Military Intelligence Division)と設立されたばかりの米国諜報機関のトップであったドノヴァン大佐に行った。

米国との軍事的協力を強化しようと懸命であった英国は、孤立主義志向の政治団体アメリカ・ファースト委員会の世界観を共有するフェラーズ大佐(1941年に昇格していた)に英国の北アフリカ作戦の機密情報を気前よく提供し、フェラーズはカイロ市内からこの機密情報を米軍の最高機密の暗号でワシントンの陸軍省へ打電していた。フェラーズのこうした最高機密電報は、ドイツ側と英国側に読まれていた。

実はロンメル将軍は、フェラーズの報告を逐次入手していた。フェラーズが使用していた暗号は、ドイツにより解読されていた。チャーチル首相は、英国諜報機関がウルトラで解読した情報をすべて同機関のトップから受け取っていたが、北アフリカの英国軍の軍事動向に関するすぐれた分析と情報を提供していたドイツ側暗号名「いい情報源(Good Source)とは、フェラーズのことであった。ヒトラー(Adolf Hitler)、リッペンドロップ(Joachim Von Ribbentrop)、ロンメルたちは、フェラーズを「いい情報源」として重宝した。早い時は、フェラーズがカイロ市内の電信会社から打電して2時間後にはベルリンはその暗号電文の解読を終了していたのであった。フェラーズがカイロの電報局に提出した暗号電文は、暗号解読後ロンメル将軍の手元に届き、その結果ドイツ軍は北アフリカにおける英国軍の動向を詳細に把握できた。百戦錬磨のロンメルに直面したチャーチルは敵将の勇猛と知略に動揺し、また、1942年1月英国議会でロンメルの勇猛さ

を賞賛すらした。しかし、チャーチルは、1942年4月以降、英国諜報機関のウルトラによる解読で、北アフリカ方面英軍内にドイツ側に機密情報を提供する者がいることを察知し、同年6月になるとフェラーズが使用する暗号がドイツ側に解読されていることを突き止めたのであった。

1941年8月、ローマの駐イタリア米国大使館勤務の現地職員になりすましていたイタリア諜報機関の工作員は、同大使館付米国陸軍武官の金庫より暗号解読資料を複写することに成功した。その結果、イタリアとその同盟国ドイツは英米が利用していた暗号の解読を行っていた。

1942年6月21日、イタリア領リビアの要塞トブルクを支配していたイギリス軍は、ロンメル率いるドイツ軍による奇襲攻撃で降伏した。5月以来ドイツ軍に包囲されていた英国は、4万5千人もの英軍兵士を捕虜に取られ、1000両以上の戦車と野砲を失った。チャーチル首相は、北アフリカ方面の英国軍トップの入れ替えを検討しはじめた。

トブルクは、天然港を持ち、また、東リビア最大の飛行場に隣接していた戦略的要衝の地であった。イタリアの対連合国宣戦布告(40年6月)後、イタリアが英国の守備するエジプトへの侵攻作戦に失敗していくなか、トブルクは、1941年1月22日イギリス軍によりイタリア軍から奪われていた。トブルクの陥落を含め北アフリカ戦線で劣勢に立たされていたイタリア軍は、1941年2月にドイツより軍事的支援を受けるようになった。同地域での軍事展開を始めたロンメル将軍率いるドイツ軍は、1941年4月から11月にかけて、トブルクを包囲していたが、11月に英国軍に撃退され、リビア奥地へと撤退していた。

1942年6月、トブルクが前年と違い、容易にドイツ軍に落ちると、アレクサンドリアとカイロがロンメル戦車部隊の猛進撃をさえぎる盾を失い、両市がパニック状態に陥った。

ここに至るまでの半年間、戦力面で圧倒的に不利であったロンメル将軍の快進撃を支えた要は、フェラーズの北アフリカの英国軍に関する軍事情勢分析であった。このことが英国側により同年6月中旬にドイツの情報源がフェラーズであったことがつきとめられた。これがいわゆるフェラーズ事件の概要であり、英国のドイツ暗号解読ウルトラと、米国の日本暗号解読マジックを英米双方が情報共有し合うことを礎とした英米同盟関係を揺るがし兼ねない事件であった。この情報共有が、北アフリカにおける英国軍の甚大な損害をもたらしたからであり、本来、対枢軸国暗号解読はこのような事態を最小限に止めようとするところに意義があったからである。しかも英国側は、フェラーズに気前よく英軍の北アフリカ作戦に関する情報を提供していたなかでこうした軍事的劣勢を招いており、これは英国にとっては面目丸つぶれの話であった。さらに、後述するが、フェラーズは、北アフリカにおける米軍の対英国軍事支援の踏み込んだ拡充という政策提言を米国大統領に進言し、大統領がそのような決断を行う決定的な判断材料となっていた。フェラーズのこ

のような政策貢献は、マーシャルとアイゼンハワーのフェラーズに対する心情を複雑にさせていたのは間違いない。チャーチルは、大統領の北アフリカ方面対英支援助の判断に決定的な役割を果たしていたことは知らなかったであろうが、ドイツが、フェラーズの暗号文書を解読できたことで、北アフリカの英国軍に甚大な損害をもたらしたことを、本人の過失はないにしろ、問題視していた。マーシャルとアイゼンハワーは、フェラーズの彼らを頭越しに行った大統領への進言を問題視していた。

この後英米の同盟強化を最優先課題とする両国は、両国関係に暗い影を落としたこの事件を、両国政府首脳、マーシャル参謀総長、その腹心の参謀アイゼンハワー准将など、ごく一部の政府高官のみが知る事柄として、隠ぺいした。彼らは責任問題に発展することを恐れていた。

英国の軍事機密情報がドイツ側に漏れているというチャーチルの疑心は、フェラーズ関係以外でも6月のトブルク陥落前後に判明した。6月の軍事作戦でドイツ軍の通信施設の攻略に英国軍が成功したさい判明したことであった。この軍事作戦で、ドイツ軍が英国軍の無線での会話をよく傍受していたこと、また、カイロ市内に相当なスパイ網が存在していたことであった。この作戦後、英国は、無線による英国軍同士の会話を必要最小限にする情報管理を行い、また、カイロ市内のドイツ軍のスパイ網の検挙に成功した。

第2次世界大戦の諜報史に名を残すエジプト育ちのドイツ人工作員ジョン・エプラー（John Eppler）を中心とするスパイ活動は、後にエジプトの指導者となるナセル（Gamal Abdel Nasser）やサダト（Anwarel Sadat）らエジプト人革新将校の思惑を利するところがあり、この将校たちは、エプラーのスパイ網に協力していた。彼らは、リビアからエジプト領内に侵攻するロンメル軍団がカイロに近づいたところで蜂起することで英国のエジプト支配に終止符を打つことを目論んでいた。

しかし、エプラーのスパイ網の一斉検挙と平行する形でこの決起計画も英国軍と英国諜報機関により打ち砕かれた。

フェラーズは、この機密漏えい事件が発覚したさい、本人が知るすべもなかったこの重大な暗号解読事件について強い衝撃を受けた。本人は、米国陸軍省の暗号の取扱いに関するたびたびの不備を指摘していた<sup>(10)</sup>。

また、彼は、1942年春以来、情勢分析に基づき北アフリカへ米国の大規模な兵力の投入と航空機と爆撃機を含む装備の大規模な増強を積極的に行うべきであると米国陸軍省に主張していた。彼のこうした判断は、フランクリン・ルーズヴェルト大統領の支持を得ていた。

しかし、フェラーズの見解は、増援に消極的なマーシャル陸軍参謀総長とアイゼンハワー率いる陸軍作戦部（Operations Division、戦争計画部から改称）の見解と真正面から衝突するものであった。6月上旬になると、ルーズヴェルト大統領もフェラーズの見解と同様の見方を論じるようになった。この時点で、フェラーズの大統領に対する政策面での影響は不明であるが、6月下旬以降、それは資

料面で裏付けられるようになる。ただし、大統領もフェラーズが主張していたような無制限な米軍の投入には反対であった。

この時期、マーシャル参謀総長とアイゼンハワーは、まだ英仏海峡作戦の可能性を含めた複数の作戦を検討していた。このため、マーシャルは、北アフリカ作戦への米軍の兵力と装備の投入を限定的にさせたかったため、フェラーズの任務はあくまでも情勢分析で戦略判断を行うものではないとルーズヴェルトに唱えた<sup>(11)</sup>。

フェラーズの政策提言が大統領に大きく影響したこともあって、7月25日の米英合同参謀会議で、米軍の北アフリカ上陸作戦トーチ（Torch）は、アイゼンハワーのもとで具体化されることとなった。この会議で、6月24日に既にロンドンに米軍欧州方面総司令官として着任していたアイゼンハワーが、トーチ作戦の米英軍の総司令官になることが決まった。これは、アイゼンハワーが望んできた前線での司令官としての職歴という、彼にとっては、軍歴上の「天祐」であった。しかし、ソ連が強く要請していた第2戦線を英仏海峡越えに設けることは、見送られた。いうまでもなく、ノルマンディー上陸作戦は、1944年6月に行われた。チャーチルがルーズヴェルトに強く働きかけた北アフリカ上陸作戦は、フェラーズの政策提言が大統領に決定的な影響を与えたわけであるが、歴史的に振り替えると、英仏海峡越えの第2戦線開設の遅延は、スターリンの米英に対する不信を強めることに大きく貢献したのみならず、米英主導でドイツを早く屈服させるシナリオがなくなり、東欧がソ連の影響下に入らないような状況を防げなかった。こうした流れのツケは、1950年代、大統領就任後のアイゼンハワーを大いに苦悩させるのであった<sup>(12)</sup>。

フェラーズは、1942年8月に帰国すると早速大統領にホワイトハウスの執務室にて約35分間話す機会を与えられていた。ルーズヴェルトの北アフリカへの米軍増援の判断にフェラーズは決定的な判断材料を提供していた。

フェラーズの政策提言が、北アフリカにおいて独伊を物量面で圧倒し始める時期を早めることに貢献したことは間違いない。しかし、フェラーズは自らとった判断で大きな代償を払うこととなった。チャーチル首相は、フェラーズの中東方面復帰の話が英米間で持ち上がったさい、米国政府上層部に対して、フェラーズは反英的であると主張したのであった。チャーチルは、なぜフェラーズが反英的であるかその根拠を述べなかった。ただ、チャーチルは、ドイツ側が打電していたフェラーズ情報に基づく最高機密電文を、ウルトラによる解読で読んでいた。そのなかには、英国軍の無能ぶりを分析するところもあったものと思われる。このようなフェラーズの批判は、チャーチルの怒りを買ったのであろう。あるいは、フェラーズはこの機密漏えい事件の被害者ではあったものの、英軍に甚大な損害をもたらしたことに貢献してしまったため、彼の中東方面への再登場を敬遠したのであろう。それから、チャーチルは、フェラーズと米国内のアメリカ・ファースト委員会とのつながりを把握していたのかもし

れない。一方、マーシャル参謀総長とアイゼンハワーは、フェラーズの政策提言は越権行為に映った。アイゼンハワーにとっては、マニラ時代のフェラーズに関する苦い思い出を再現させるような事態であった。

フェラーズは帰国後准将に昇進したものの、これら3人に睨まれたことは彼の軍人生活には暗い影を落とすものとなった。

フェラーズは、暗号がドイツ軍により解読されていることを英国軍により知らされた時は憤激し、また意気消沈したそうである。しかし、フェラーズは暗号の取り扱いについて彼自身と部下たちに手落ちは無かったと確信していた。米国は、フェラーズに新たな最高機密の暗号を与える一方、英米の要請によりフェラーズは通常の情報はすでに独伊が解読していた従来の暗号を使用することでドイツ側に暗号解読がばれていることを悟られない措置をとった。一方、英国軍は、エプラーらの検挙に気づいてないドイツ軍に対してエプラーに成りすまして偽の情報を送り続けた<sup>(13)</sup>。

こうした英国の情報攪乱作戦は、ロンメル率いるドイツ軍の進軍を妨げることに貢献した。ロンメルの軍団は、1942年7月1日から27日にまで行われた第1次エル・アラメイン戦で、同地より東へ106キロのアレクサンドリアを目指そうとしたが、英軍に阻まれた。ロンメル軍団は、戦力不足に陥り、戦いは硬直状態に陥った。こうしたなか、米国からの増援を受けた英国軍は、第2次エル・アラメインの戦い(1942年10月23日から1942年11月4日)でロンメル率いるドイツ軍に壊滅的な打撃を与え、彼らはチュニジアまで敗退していった。トブルクは、11月11日に連合軍により奪還された。以降、枢軸国側はトブルクを再度奪取することはなかった。

フェラーズの暗号電報を解読できなくなったことは、ロンメル率いる軍団の敗北に大いに貢献したといえよう。ロンメルの高級情報将校の回想録によると、6月29日以降フェラーズからの情報が全く途絶えたのであった<sup>(14)</sup>。

1942年夏から秋にかけての連合国側の北アフリカにおける勝利は、無論、情報戦における勝利のほか、次の要因を指摘できる。まず、英米のドイツ軍とイタリア軍使用の暗号解読(ウルトラ)により、イタリア半島からロンメルに海上輸送されていた石油などの補給路が遮断されたこと、次に、北アフリカ中東方面英国軍トップの交代人事による英国軍の組織的改善が行われたこと。最後に、1942年8月から本格化した米国からの軍事物資の北アフリカ導入と米国空軍の活躍。この最後の点については、フェラーズの意見具申がルーズヴェルトの決断に決定的な判断材料を与えていたのであった。

一方、フェラーズは当時知ることはできなかったであろうが、ドイツ側が暗号解読していたフェラーズの6月前半の打電で、英軍がマルタ島防衛のため、秘密作戦を行う予定であることを把握し、ドイツ側はこの秘密作戦を待ち伏せして殲滅することに成功した。英国はマルタ島の防衛に成功はしたが、この秘密作戦の失敗で数千名の英軍将兵の命を失った。

ロンメルの高級情報将校を務めた人物の回想録によると、ロンメル将軍の1942年前半の軍事作戦の成功に貢献した情報源は、1位がフェラーズの報告書の暗号解読、2位が英軍のワイヤレスの通信傍受であり、エプラーの情報は全く役に立たなかったのであった。

フェラーズは、カイロに武官として赴任後、米国政府に報告を送るさい、駐カイロ米国公使カーク(Alexander C. Kirk)と同様の見解であったが、英国軍指揮官の無能ぶりや英国軍の士気の低下を報告していた。こうした内容は、ウルトラを通じてチャーチル首相が知るところとなったと思われる<sup>(15)</sup>。

### 3. 帰国後の大統領との会談と中東への思い

8月中旬に駐エジプト武官生活を終えて帰国したフェラーズは、帰国後さっそくルーズヴェルト大統領に呼ばれて大統領と会談した。また、スティムソン(Henry L. Stimson)陸軍長官は、フェラーズが北アフリカから同地域の軍事情勢について明快で的確な報告を行っていたことが米国軍の戦術的および技術的發展に貢献したということで、陸軍長官から直々本人に殊勲章(Distinguished Service Medal, DSM)が9月に授与された。エジプトを去る際カーク公使や米陸軍中東方面司令官などからその帰国が惜しまれたが、英軍は秘密暗号解読の責任の一端がフェラーズにあるように思うフシがあった。

帰国後のフェラーズは同期で最初のDSM受賞者となったり、また、エジプト武官時代に蓄積した砂漠における戦闘の知識を全米各地の戦車部隊の訓練施設などで披露することで、米軍関係者に重宝がられた<sup>(16)</sup>。

カイロの武官時代、フェラーズは、米国が中東のアラブ人やイスラム教徒の民族自決への意欲に理解を示しながら、米国がこの地域の人々と良好な関係を構築する必要性を確信したのであった。フェラーズは、パレスチナへのユダヤ人の入植とシオニズムに批判的であった。フェラーズは、アラブ・イスラム圏が直面する問題に気を配っていた。フェラーズのこうした考えに深い影響を与えたのが、カイロで知り合ったラーマン・アブドラ・アザム・パシヤ(Rahman Abdul Azzam Pasha)であった(PashaとBeyは、エジプト王が政府高官に与えた称号である)。フェラーズは、アザム・パシヤが、アラブ人の同胞たちとともに、東リビアでイタリア軍と戦ってきた指導者であることを評価していた。

このような持論を、フェラーズは、ルーズヴェルト大統領との35分にわたる面談で披露した。大統領は、同情的な態度を示したものの、具体策については何ら言及しなかった。フェラーズは、似たような見解をハル(Cordell Hull)国務長官とウェルズ(Sumner Welles)国務次官に述べたが、彼らはフェラーズの見方に全く同感であった。1943年夏、フェラーズはアザムの依頼で米国とエジプトの学生の交換留学の開設の可能性を模索したが、戦時中であつたためタイミングとしては無理であるとアザムに返答した<sup>(17)</sup>。

ラーマン・アブドラ・アザム・パシヤは、1944年エジ

プト国王の命令でエジプト政府外務省のアラブ問題担当公使になった<sup>(18)</sup>。ラーマン・アブドラ・アザム・バシヤは、1945年から1952年までアラブ連盟の初代事務局長をつとめた。(余談だが、彼は、アルカイダのナンバー2であるアイマン・ザワヒリの親戚である。)

#### 4. 戦略情報局企画部勤務

フェラーズの次の勤務先は、陸軍省より出向する形で、組織化される途上にあった戦略情報局(OSS)の心臓部になる予定の企画部(Planning Group)であった。同部署で勤務を始めたのは1943年1月であったが、それまでは米国の戦車部隊の学校や訓練所で北アフリカにおける戦車戦について講演を行っていた<sup>(19)</sup>。

この時期のフェラーズは、彼を毛嫌いしていたアイゼンハワーの北アフリカ作戦に関与することを望み、ドノヴァンに働きかけていた。アイゼンハワーの参謀長は、OSSの創設に深く関わった元統合参謀長会議秘書官ウォルター・B・スミス中将(Walter B. Smith, 戦後中央情報局長官)であったが、スミスはフェラーズが再び北アフリカ入りすることに異論がないことをドノヴァンに伝えていた。しかし、この人事は実現せず、フェラーズはOSS企画部勤務となった<sup>(20)</sup>。

豪州のブリスバーンに赴任する直前のフェラーズは、駐米国ユーゴスラビア大使の知り合いでもあり、フェラーズが後押しする英国在住で英国政府の諜報機関採用の亡命ユーゴスラビア軍人G・ポポビッチ(G. Popovitch)大佐の人事に関与した。ロンドン在住の亡命ユーゴスラビア政権のリーダーであったピーター王とOSSとの(連絡係にポポビッチをOSSに採用させようとしたのであった。フェラーズは、欧州方面の諜報担当最高責任者であった外交官デービッド・ブルース(David Bruce)大佐とこの件について情報交換した。両者の間で話題になったこの人物については、ピーター王とその顧問たちの不信感が根強かったことであった。このため、フェラーズが推進しようとしたこの人事は、失敗した。

フェラーズは、デービッド・ブルースに、ポポビッチは信頼できると強調していた<sup>(21)</sup>。

#### 5. おわりに

フェラーズは、1941年から1942年の中東をめぐる国際政治と情報戦で、2つの大きな足跡を残した。ひとつは、フェラーズ事件であった。もうひとつは、1942年夏の米国の対中東戦略判断に決定的な影響を与えた、大統領への戦略分析の提供であった。これは、上官を頭越しに大統領へ直接行われた。このことに加え、アザムとの関係やユーゴスラビア情勢への関与、そして、中東方面への復職の模索は、本人の行動力や野心家の度合いを物語る事柄であった。フェラーズは、エジプトにおける「過去」をひきずりながら、1943年秋以降太平洋方面で、野心に基づく行動力でマッカーサーの側近として活躍するのであった。

#### 注

- (1) November 26, 1943, Countess of Ranfurly, *To War with Whitaker: The Wartime Diaries of the Countess of Ranfurly, 1939-1945* (London: Mandarin Books, 1994), 202. 翌日、アイゼンハワーは、前夜の非礼を謝り、子爵夫人とのおわびの夕食に秘書を通じて招待したが、子爵夫人は、先約があると偽り、断った。
- (2) November 4, -12, December 1, 1940, *Ibid.*, 70-73.
- (3) February 10, 1941, Countess of Ranfurly, *To War with Whitaker*, 78; John Bierman and Collin Smith, *Alamein: War without Hate* (London: Penguin Books, 2003), 127.
- (4) April 30, 1941, Countess of Ranfurly, *To War with Whitaker*, 90.
- (5) June 22, 1941, *Ibid.*, 97.
- (6) January 1, 1941, *Ibid.*, 117.
- (7) Stephen E. Ambrose, *Eisenhower Volume One: Soldier, General of the Army, President-Elect, 1890-1952* (New York: Simon & Schuster, 1983), 53, 70-71, 119-28, 130, 424. フェラーズ、マッカーサーとアイゼンハワーのフィリピン時代の関係については、井口治夫「共和党右派とダグラス・マッカーサー大統領候補擁立運動」『史林』第92巻第5号(2009年9月)105-108頁を参照。
- (8) Fellers to Carter W. Clarke, August, 1940, Folder 9, Box 1, Bonner F. Fellers Papers, MacArthur Archives, Norfolk, Virginia (以下BFF, MAと略称)。
- (9) Andrew Lycett, *Ian Fleming* (London: Phoenix, 1995), 131.
- (10) David Alvarez, "Left in the Dust: Italian Signals Intelligence, 1915-1945," *International Journal of Intelligence* 14 (2001), 396-97; Anthony Cave Brown, *Bodyguard of Lies* (New York: Harper and Row Publishers, 1975), 101-23; Jay Jakub, *Spies and Saboteurs: Anglo-American Collaboration and Rivalry in Human Intelligence Collection and Special Operations, 1940-1945* (New York: St. Martin's Press, 1999), 48-92. フェラーズについては、ロンメルの情報将校の回想録を参照—Hans-Otto Behrendt, *Rommel's Intelligence in the Desert Campaign, 1941-1943* (London: William Kimber, 1985), 145 (上記"Good Source") -47, 155-56. このほか、C. J. Jenner, "Turning the Hinge of Fate: Good Source and the U.K.-U.S. Intelligence Alliance, 1940-1943," *Diplomatic History*, Volume 32, Number 2 (April 2008): 170-71. 同論文は、170頁脚注29で紹介している研究書には本文の引用句が見つからなかったり、201頁の最初の段落では、対日占領期におけるフェラーズとマッカーサーの関係について、執筆当時ウィキペディアに掲載されていた間違ったフェラーズに関する掲載情報をそのまま使用している。(注7の拙稿では、フェラーズはマッカーサーと衝突して日本を追われていないことが確認できる。)
- (11) Maurice Matloff and Edwin M. Snell, *United States Army in World War II: The War Department Strategic Planning for Coalition Warfare* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1953), 246, 253-55, 297-98 とこれら頁の脚注を参

照。

- (12) Ambrose, *Eisenhower Volume One*, 152-54, 171, 182-83.
- (13) Jenner, "Turning the Hinge of Fate," 196-97; Brown, *Bodyguard of Lies*, 111.
- (14) Behrendt, *Rommel's Intelligence*, 160, 166-67.
- (15) Andrew Buchanan, "A Friend Indeed? From Tobruk to El Alamein: The American Contribution to Victory in the Desert," *Diplomacy and Statecraft* 15 (2004): 279-301; Behrendt, *Rommel's Intelligence*, 225-28. Jenner, "Turning the Hinge of Fate," 196-200.
- (16) "Military Record and Report of Separation Certificate of Service," Brigadier General S.G. Henry to Assistant Chief of Staff, G2, September 2, 1942, "Award of Distinguished Service Medal," September 5, 1942, Folder 16, Box 1, BFF, MA. フェラーズの戦車部隊や砂漠戦争に関する講義の場所については、Folder 13, Box 38, Bonner F. Fellers Papers, Hoover Institute Archives, Stanford University, Palo Alto, California (以下 BFF HI と略称) を参照。このファイルには、暗号解読事件で、フェラーズの帰国を惜しむ関係者の資料がある—War Department Office of the Chief of Staff, "Memorandum for the Chief of Staff," October 19, 1942, Alexander Kirk to Fellers, November 10, 1942, R. L. Maxwell to Fellers, September 2, 1942. DSM の勲章授与が同期ではじめてであることについては、同ファイル内 H. L. Peckham to Fellers, Sept. 9, 1942. 暗号解読事件発覚直後については、Fellers to Marie Broach, August 13, 1942, Folder 12, Box38, BFF, HI.
- (17) Fellers to Azzam Bey, October 19, 1943, Fellers to Azzam Bey, Feb. 8, 1945, Folder 4, Box 19, BFF, HI.
- (18) Abdul Rahman Azzam to Fellers, Nov. 12, 1944, Folder 4, Box 19, BFF HI. Fellers to Azzam, August 17, 1943, Folder 14, Box 38, BFF HI.
- (19) Frazier Hunt, "A Short Biography of Bonner Fellers," Box 46 (before sort), BFF, HI. 注 22 も参照。Thomas F. Roy, ed., *Wartime Washington: The Secret OSS Journal of James Grafton Rogers, 1942-1943* (Frederick, Maryland: University Publications of America, January 12, 1943).
- (20) Fellers to Walter B. Smith, December 9, 1944, Box 43 (before sorted), BFF, HI.
- (21) Fellers to David K. Bruce, August 2, 1943; J. L. Callan to David K. E. Bruce, July 12, 1943, Fellers to Bruce, August 9, 1943, Fellers to Constantine Fotitch, Ambassador of Yugoslavia to the U.S., August 16, 1943, Folder 15, Box 1, BFF, MA.

(受稿 : 2010 年 9 月 15 日 受理 : 2010 年 10 月 25 日)